

⑭ 腹膜で危篤の主人

【歓喜の余滴】

171 先が暗い

昭和三年七月十七日

若い婦人妊娠の時未来が不安と言うから聞かして下さいと 昨年連れて来られた主人が今は腹膜で危篤！ 先が暗いと申しますから病院に出す前に聞かして下さいと夫人が泣き泣き来られた、行って見ると中々の重患、と切れくに、
今迄は理屈も知り書物も読み信じてもいたけれども 今と成って見れば堕ちそうで先が恐ろしくて仕方が有りません、どうしたらよろしゅうございませうか。

それから先は私も知りません、助かるか堕ちるか そんな先の世話まで焼かなくても 現在の貴殿の心の中はどんな心が動いていますか、煩惱の渦が巻き、反逆の潮が押し寄せて来てはいませんか、その業に引かされて堕ちるのだから、誰を恨む事も無ければ呪う事も有りません、暗い世界へ行くのが自業自得なので 誰一人として加勢してくれる者も無ければ、業を引き受けてくれる人もいません。火の玉を抱えて泣かねばならないのです。 今迄聞いていたのは画いた餅ですから 如何に立派に見えても空腹を満たす事は出来ないのです、堕ちる者をお助けと信じ切つていても 平生と臨終とは有間心と無間心の違いがあるから、平生の時魂が死に切つていなければ瀬戸際でその疑雲が出て来るのです。

172 生きた三部経を読んだ

誰が何と言つても自分の心は自分が一番よく知っています、死の淵に臨んで見なければ実地は体得出来ないのです、決して貴殿は現に火車に乗せられて三途を目がけて走っていらるるではないか、行けば堕ちる 一刻も止まる事も出来なければ、一秒も退く事も出来ない、万策尽きた時、何れの行も及び難き身なればとても地獄は一定住家ぞかすと仰せられた御言葉が生きて来るのではないか、有難いも嬉しいも知ったのも覚えたのも、学問も理屈も総てが間に合わない、生死流転の大暴流に

他力の真似をしている少善根では堰き止められない、苦悩の心の燃え上がっている今は親が知っているから安心せよでも間に合わない。

嗚呼先が真暗いがどうしましょうか。

私は知らないから一人で行きなさい。

此の儘が地獄じゃが どうしましょうか。

・・・そうです、自分で自分に始末の付かぬ心と共に堕ちてやるぞ、泣いている儘が私の一人子であるぞ、十劫已来立っていた甲斐が有つてよくも自性の有りたけを出しておくれた、其の心こそ五兆の願行の正客じゃぞ！ と仰るのです。

あらー！ 唯と言えば此の儘でしたか、何にも判り切らない儘が唯でございましたか、何とか成ろうくと一心に成つて見たが 私の総ては皆役に立ちませなんだ、何にも判り切らない儘が唯でございましたか。

そうです、堕ちるも参るも判り切らない儘じゃと判つた処に本当の唯が有るではありませんか。

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、嗚呼、生きた三部経を読まして戴きました、ああ堕ちる自性を堕ちまいとあせればこそ

苦しかったけれども、堕ちなければ必ずうのが生きては働かないのであつた。おい、俺が死んでも三部経を読んで貰わな

くてもよいぞ、名号六字を聞き開いた時 三部経も八万の法蔵も宇宙全体も読まして戴いたのだから、しお前達の報謝なら

勝手じゃがのー、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏と 家内に言った。

173 医者も坊さんも当てに成らぬ

御院家さん有難うございましたくと重病人が握手を求め、嗚呼今迄は当に成らない医者を当にしていた、たよりにならない坊さんをたよりにしていたが、最後臨終になれば全ての物が助けにならない、唯々南無阿弥陀仏だけが私を慰めて下さいます。本当に今迄は何故真剣に聞かなかつたのであろうか、御院家さん実地になつて見ると机上の空論では間に合いませんな

恐れなしの境地である。私の進む処には障碍はない。墮ちる者をお助けと言う持物なら忘れる時も有ろうけれども、何にも持たせない法龍の儘が六字と一体とは称えずにはいられない、叫ばずにはいられない、大応供の御前には称え過ぎもしも無ければ報謝のし過ぎもない、寝た儘が南無阿弥陀仏、動作の儘が南無阿弥陀仏、親に逢わない方々が百千万人攻撃をなさろうとも親が知っている、子が知っている、南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏。

177 石工を見て

七月二十三日

お墓を作るのでも 最初から磨きはかけない、初めは大きい凸凹を平らにし、次は小さく刻んで最後に磨き上げる様に、信仰も最初から十把一束には行かない、初めは浪花節や落語の出来損ないのな話から面白可笑しく引寄せられて参らずにいらなくななり、有難い心に連れられて盛んに報謝をし、調子を合わし理屈もよく判り之で大丈夫と思っていた人が法の鏡にし抜かれて 最後に仏凡一体、機法一体、不可称不可説不可思議の境地に出されるのである。

信仰も一朝一夕にはしてには入らない、みんな第十八願の一本槍でよい、十九、二十を教える必要は無いや言っていられるけれども、そんな事を言う人は阿弥陀様よりも賢い自惚強い善人である。真実の真実たる所以は 方便の方便たるを知らされて進むのではないか、十九、二十の仮門の必要が無いのなら何故阿弥陀仏は本願として建立されたであろうか。

十方衆生のその中には自力の行を自力の心で扱う機類が有ればこそ 第十九願が必要ではないか、さらに進んで少善根の福德の因縁たる万行は捨て 他力の名号に帰したけれども、自力の心を捨て切らない機類がいればこそ 第二十願の嫌貶開示が有るのではないか。最後に自己の魂に驚き、信ずる心も念ずる心も持ち切らない絶対不二の機を見せつけられ、自力の心を振り捨てた処に絶対不二の教全部が動く不思議の境地有ればこそ第十八願が私の上に生きるのではないか。

この自力、半自力半他力、絶対他力の三段は今が十九願、今が二十願、今が十八願と自分の方から區別を付けて求めるのではなく、苦悩の心が晴らされた後に明かに水際は立つのである。

聖人様が化土卷の上に記されてある三願転入は、単なる仮説でも無ければ予定でもなく、如実に求め抜かれた時の魂の順路である。その順路の儘が五劫の間に、私の動く魂の総てを見貫いて成就した本願通りに計らわれ、雑行（第十九願）雑修（第二十願）自力の心（自力）を振り捨てて、（第十八願）至心信樂己を忘れて大満足し、信に信功なく、行に行功の無い他力不思議の大信海に帰入せよと、一つ一つ角を取って最後に煩惱具足の黒光りに磨き上げて下さったのである。

磨き上げられて見れば善も欲しからず悪も恐れなし、十方法界に満ちている私の煩惱が眞実功德大宝海に生かされ、波の儘が潮、潮の儘が波、私の儘が南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏の儘が私、願力無窮にましますれば、罪業深重もおもからず、仏智無辺にましますれば、散乱放逸もすてられず、私は弥陀に生き、弥陀は私に生きる、往生や正覚、正覚や往生、此の境地から顧みて生死の苦海を苦海とも知らなかった私を一步一步醒まして光明の広海に転じさせて下さった不思議の念力を思う時、私自身を動かして下さった三願の念力を謝せずにはいられないのである。

179 信じられた事を

七月二十七日

南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏、信ずる心も念ずる心も私の思いではなかった、今の氣樂さは話にならない、唯々念仏するより他に言葉はない、無条件の世界にははない、理窟が無いだけそれだけ広い尊い深いお慈悲に泣かずにはいられない、仰げば仰ぐ程、話せば話す程、かぬ心が動いた味を叫ばずにはいられない、求める時の苦しき、得た時の易さ、嗚呼私の心が私に判らなくて泣いたのだ、泣いている空涙の下に私の眞実の自性があるのだ、此の自性が光明に照らし出され散乱放逸に驚いた時には、信心も安心も、学問も理窟も、領解も解釈も総てが反古である、最後には判らないと言う言葉さえも判らない私である、と仏様が信じ切って下さった事を私が信じ切るより他に別の仔細は無いのである。

180 波の音

七月二十八日

「波の音 かじと思ひ 山籠り 苦は品替へて 松風の音」 子供が多くて聞かれない、家の世話をする間は寺には参られな

い、孫が学校に行く様になら参ろう、など言っている人は一生涯聞法の因縁が無いであろう、世を終る迄は欲に限りが無いから人間に暇と言うものはない、現在に求めない人は永久に求める機会を得ない、多忙なれば多忙の儘、なれば逆境の儘で求めなければならぬ、用事が多いからとて無常の風は遠慮をしないぞ、未だ他の用事が気に掛かるようでは真剣ではない、私が求めずにいられた時は 研究科の卒業論文を書いている最中であつたけれども、後生の一大事の解決が付く迄は筆を執らない、三年でも五年でもこの苦惱が晴れ切る迄は勉強をしないと云う決心で求めたのである、環境に支配されては進まない、周囲を征服して行く姿が「たとひにみたらん火をもすぎゆきて」の求道振りであり、三界の絆を截つて進む勇猛心ではないか。

真剣に求めた事の無い人達、一大事であると踏み出して寢食を忘れて聞いた事の無い方々には他力至極の大自然は無い。現在修羅の巷で生命を捨てて求めた人には死後のお助けばかり呑気な事は言っていない。明かなお慈悲だから明らかに聞いたら明らかに成らなければ聞いた所詮はない、墮ちる事が本当に見せつけられた時 助かる事が本当に信じ切れるのである。人々よ死ぬるぞ 今死ぬるぞ、用意は出来たか、用意は出来たか、長綱を引いては今の間に合わないぞ。